＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ふくしま　　2013. 3. 7

復興支援フォーラムニュース　No.34

（URL　http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html　）

＜事務連絡先　今野順夫（tkonno67@gmail.com）　中井勝己（024-548-8313）＞

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

震災復興における高校教育の現状と課題

齋藤　毅（福島北高校・教諭）

（福島県高校生平和ゼミナール　世話人）

（福島県立高教組　書記次長）

１、はじめに

２、２０１１．３．１１－発災時の高校

①勤務校（当時）福島東高校では

②高校の被災状況

３、学校の再開までー４月上旬まで

①避難所支援－学校による違い

＊取材によりマンガ化

ももち麗子「デイジー　３．１１女子高生たちの選択」（講談社『デザート』連載、単行本13年3月13日発売）

野崎ふみこ「ありがとう。」シリーズ震災3. 11あの日を忘れない（秋田書店『エレガンスイブ』12年12月号掲載）

②内示された人事異動の延期（11年4月1日→8月1日）

◎いつ異動になるのか、学校はどうなるのかなどの不安。被曝は全く気にしていなかった（分からなかった）。目の前の避難所対応で、動き回った。気持ちが張り、疲れも感じず、余計なことを考えなかった。

４、震災後１年目の学校（11年4月～12年3月）

①始業式･入学式－通常開始の学校と１ヵ月半遅れた学校

→　ここで始めていいのか疑問。大学受験･就職のため、子どものためで、何も言えず。

②浜通りの高校は全員合格（高校全入）

→　避難･転校で入学しない。不合格にならず入学できたが、受験校ではついていけない事例あり。

浜通りの高校では、入学意思の確認と家庭状況の把握の苦労。

③放射線量をめぐる対応

→　基準が示される以前は、県北地区高校長会の申し合せ「当面、体育・農業など屋外の授業は自粛。部活動は、保護者の承諾をとり2時間まで。」

文科省の「暫定的な考え方」に基づき、3.8μSv/h 以下ならお構いなし。
同じ学校の教職員で、意見が分かれる。
表に出して、議論ができない、させない雰囲気。
⇒　日本の学校文化、教員文化の課題。

④サテライト校の開設と教育の格差

→　緊急避難としてはやむを得なかったのか。別な選択はなかったのか。
授業の教室空間を手当てしただけ。体育館の間仕切り教室。部活動ができない。
＊知られていないが、特別支援の大規模校（知的障害）では、教室のカーテンによる間仕切りが当たり前。
もともと貧困な県の教育予算。とくに、特別支援にしわ寄せ。
1年後の集約時には、生徒の寄宿舎問題。宿舎を見て転校。女子生徒が男性労働者と同宿。
＊開設時には「入学した学校を卒業できる。」と説明。集約時に転校する生徒も出た。
劣悪な食事（その後は改善の方向）。
舎監が退職し、教員が舎監業務に従事する事態に。
（県教委は教員の舎監はないと明言していたが。）

⑤教員採用の停止（高校・特別支援は、国・数・理・工の一部のみ実施）と県教委の無策

→　他県に避難した児童生徒への対応「(避難先の教委に）お願いするしかない。」との発言。
兼務辞令の発令。被災･避難した教員の場合、避難先と勤務先と兼務先で移動が困難な事例あり。
文科省の加配措置、県教委は2回目でやっと要請。
＊加配された教員定数は、減少した児童数に基づいて過員となった教員を定数内に読み替えるために使われた。だから、教員は増えていない。

⑥全国高校総合文化祭の開催（11年8月）

→　何年も前から準備してきたこと。やるしかなかったのだろうが、他県の現場からは非難あり。

◎年度途中の異動。授業担当､校務分掌の途中交代。異例ずくめの中で時間が経過。
夏休みから、民間教育研究団体や組合などから報告を求められ、対応。
告発型の状況報告はできるが、展望が持てないもどかしさ。
11年秋頃から、県高校社会科研究会等でも授業の取り組みの報告･交流が始まる。

５、震災後２年目の学校（12年4月～13年3月）

①教員の意識―組合定期大会の発言から（13年3月2～3日）

（特）　学校給食の放射線量検査、１０Bq 以上のものは使わないが、職場にそこまでやる必要があるかという声もある。教員には放射線対策は、余計な仕事と考えている人もいる。公正な裁判を求める署名に、もうたくさんだと断る教員もいた。２年もたつと、いい加減にしてくれ、もう関わりたくない、という人も多く、意識の分断が起きている。

（高）　不安の中味を知りたいと、アンケートを実施。福島出身と知られたくない、差別

が心配。しかし、再稼動を容認する回答が8割を超えた。(⇒　資料①)　卒業式の答辞で、進路を考える時に大きな影響を与えた、と語った。放射線技師、カウンセラー、メディア論を学びたいという生徒が目立った。

（高）　判定会が中断されて、結果全入になった。授業中は、おしゃべりもせず、眠りもせずにいる。赤点は取るが、指導すれば何とかなる。他の生徒とどこも違わない。入学できなかったら、どうなっていたのかと考えてしまう。

（高）　不安は口にできないという状況で、仮設校舎で隣りの授業の声が筒抜けだが、生徒は頑張っている。親の不安は、被曝のこと、除染の早期化のこと。両親離婚で、遠くの高校に転校していった生徒もいる。保健委員会にデータを出したが、保護者からはもっと低い数値を出してくれと苦言。学校医からも校長からも口外を止められた。現在の実測値を知ることを呼びかけているが、取り組めない学校もある。学校でのＷＢＣの検査は、なぜ一本化して健康教育課でやれないのか。養護教諭の声を地域医療課に届けたら、初めて聞いたとの反応。問題は高校だ。具体的に声を聞かせて貰えないかと呼びかけられ、今度直接会って説明する。各地に発信していかないと、福島は忘れられていく。全国から支援してもらい、私たちが疲れてしまわないようにしたい。もう忘れたい、見たくないと思わないようにしていく必要がある。自分たちが放射線になれてしまわないように、感覚を鈍麻させないようにしたい。

（高）　ユネスコスクールの発表会で、原発はなくなりそうでない、逆に原発がなくなれば広大な太陽光パネルが必要になる、と生徒は報告。原発事故の件で、教師の認識が枠を越えられなかった。誰が担当するのか、校務分掌の枠組みで、誰も担当できなかった。個人的に発信した人が、いずれ学校を去った。困っている子ども、学校をしっかり見つめて、子どもたちに福島で起きたことを総括させる必要がある。いま、高校生は、自らの思いを発信したがっている。９０周年記念誌の編集で、教師の文章を集めているが、出してくれたのは、まだ２名だけ。

②体罰や部活動にも通底する問題―組合定期大会での発言から

（高）　体罰調査の調査期間（12年4月からの1年間）を見て、ドキドキした。教師が力で押さえつける、それが

日常化してしまう現実がある。朝日新聞に、内田樹さんが日露戦争での成功体験が根っこになっていると書いていた。体罰は根が深いことだが、なくさなければならない。体罰問題では表れてこないものがある。

部活動推薦の生徒が、目が出ないと怯えながら部活動や学校生活を送っている。成績単票で、生徒氏名欄が番号になっていることがあった。生徒を名前のある存在でなく、記号として扱っている。教員として、体罰以外でも同じようなことがあるのではないか。太宰治だったかは、力とか命令とかで人を支配することはできるが、人を感動させることはできない、と言った。別な形で展望を提示することができるのではないか。

（高）　体罰は２種類あって、冷静にやるのとかっとしてやるもの。即効性があるので、暴力に頼る。

（高）　運動部の顧問が嫌われる。子どもを産んだばかり産育休明けの若い女の先生を、運動部の単独顧問につける。強い部活動ほど保護者などから顧問への当たりも強く、休めない。保護者とコーチに引っ張られて、１年間人身拘束される。

（高）　熱心な部活動が夜９時頃まで活動し、終わりまで教頭が付き合っている。体調を崩して休職した。部活動の超過勤務は、常態化している。体罰については、管理職が自らの出世のために、辻褄合わせをしている。　　日本の学校には、外から精神まで歪めてしまう矯正文化、軍隊文化があり、それがずっと続いている。

③高校生による表現・発言

○被災･避難した高校での文集作成→　個人情報の壁。部外者には見る機会がない。

○福島県立高教組女性部『福島から伝えたいこと』（12年4月発行、現在第4刷、4000部普及）に掲載された生徒の声。（⇒　資料②）

○演劇→　ふくしま総文　総合開会式　第3部構成劇「ふくしまからのメッセージ」（YouTube で視聴可）

相馬高校放送局「今、伝えたいこと（仮）」（13年3月3日、南相馬市鹿島区さくらホールで公演、地元での初公演で最後。「ふくしま会議」の主催公演。）

○朗読→　「たねまきうさぎ」の活動。

○絵画→　福島西高校デザイン科の生徒作品（小林みゆき「高校生たちの作品と思い―震災体験を問い続ける」雑誌『教育』13年3月号掲載）（⇒　資料③）

○高校生の発言→　報告者が司会を務めた「高校生座談会」座談会。（13年1月14日、仙台市にて実施、全教機関誌『クレスコ』13年3月号掲載）（⇒　資料④）

④二本松市のＡ高校の取り組み

○ユネスコスクールに認定。「復興教育」の取り組み。持続可能な教育の概念で課題学習。

＊原発は再稼動が前提。（原発ゼロをめざすとする報告はなかった。）観光による風評被害の払拭や再生エネルギーへの転換に言及。賛同と批判。

○家庭科の実践→　昨年は、雑巾を縫い、仮設住宅を訪問して清掃奉仕。
今年は、仮設住宅を訪問し、郷土料理の聞き書き、避難者との交流。
避難時の状況やその際に持ち出した物を聞き取る。

＊浪江地域の食文化や生活文化、防災の文化についての学び。地域の日常の暮らしにこそ、持続可能な社会・暮らしを学ぶ手がかりがあるはず。

＊水俣の吉本哲郎（元水俣病資料館長）による「地元学」提唱。→　奥会津の川口高校での地元学習。

⑤福島県高校生平和ゼミナールの結成（結成集会：13年1月27日、こむこむ）

○平和や地域の課題を学び合うサークルで、高校生を中心に学生・市民で組織。
結成時は高校生10名、世話人2名。高知県幡多高校生ゼミナールとの交流をきっかけに結成。

＊発端は、幡多ゼミの顧問である元教師の山下正寿さんが、第2回「焼津平和賞」受賞賞金の一部で、福島の高校生朗読グループ「たねまきうさぎ」4名を高知に招聘してくれたこと。

○第1回幡多訪問（11年11月3～6日）では、宿毛工業高校などで朗読。

＊生徒の発言（感想）

・「汚染された大地に生きる私達のこの思いを、今回のような行動で一人でも多くの方々に知ってもらえたらと思います。信じられないほど透き通った四万十川、熱帯魚が泳いでいた宿毛湾、海・山・川の幸，沢山の美味しい食べ物、この美しい高知が私達の故郷のように壊されてしまうことがあっては、絶対にいけません。二度と、こんな思

いをする高校生を作ってはいけません。機会があれば、またこの思いを言葉にしたいです。」

・「私は、普通の高校生活を送ることだけで精いっぱいで、原発の問題は誰かが解決してくれる、自分の問題ではないと考えていました。ただただ政府の対策を待ち、それが遅いことを訴えるだけで、自分に何ができるかなど、これくらいも考えませんでした。何か自分のできることをすべきだと思っていましたが、結局自分には何もできないと決めつけ、自分を否定していました。今回こういった機会を得られたからこそ、その考えは疎かと気づきました。高知で心に刻んだこと、体験したことをまずはたくさんの方に心の底から伝えようと思いました。」

○釜山訪問（12年8月5～8日）では、高知・釜山の交流に静岡（エバーグリーン）・福島（たねまきうさぎ）の高校生が合流。ハプチョン（韓国のヒロシマ村）では在韓被爆者と交流。顧問等は古里原発も訪問。

○第2回幡多訪問（13年3月22～25日）は、「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」の「春休み高校生自主計画保養プログラム支援プロジェクト」の費用助成で訪問実現。

○今後、ドキュメンタリ―映画「フクシマに向き合う青春」（仮題）として記録。「ビキニの海は忘れない」「渡り川」「こんばんは」「ワーカーズ」の森康行監督が、幡多に関わる3作目の作品。

６、今後の課題

①高校教育の「震災復興」とは何かを考える。

→　壊れた校舎の復旧、統廃合で新しい学校をつくることが復興ではない。

（モノの復興）

復興とは、未来を担う子どもたちの「人間の復興」に違いない。（ヒトの復興）

そのためには、教育と学校を変えること、教員文化を変えることが必要。

手立ては、「子ども・父母・地域住民に開かれた学校づくり」「ゆきとどいた教育の保障」

「教職員の長時間過密労働の解消」など。

②震災後、福島での高校教育の意味、高校の存在意義を問い返すこと。

→　「受験。卒展。放射能。なかでも受験がいちばん重かった。」「受験で震災を考える余裕がなかった。」（⇒　資料③）

若年時のライフコースを決定する受験が大事なのは確かだが、震災後の今もそれでよいのか。

③高校生の進路意識変化のきざし。　＊全県的に進路指導主事あてに調査をかけてみたい。

→　「進路を考える時に大きな影響を与えた」との言葉。

単純な復興人材の育成につながる危険性とそれを乗り越える期待。

④教育実践の課題

→　「フクシマの原発・放射線教育、復興教育」を創造する必要。

・Ａ高校の復興教育を批判的に乗り越え、全県的に豊かに展開。

・原発･放射線教育の創造と交流、典型の形成。

＊福島大学放射線副読本研究会の副読本など。

会津教育研究所、京教組・京都教育センター等の「どう教えるか」の手引きなど。

・幼保・小・中・高・大・市民を貫き、発達段階に応じた原発・放射線教育の福島モデルの作成。

・民教研・組合・職場・自主的研究会での実践交流。交流のネットワークづくり。

→　高校生にどんな力をつけるのか。

・憲法を生かし、平和で民主的な社会を形成する主権者として、自立できる力。

・自他の生命を守り、互いに助けあい、信頼しあう力。

・人間的な信頼関係や絆を結び、夢や希望をつむぎだす力。

・意見の異なる人々との熟議を通じて、問題を解決する力。

・科学的な知見を持ち、事実に基づいて判断し、自らの行動を選択できる力。

・自ら情報にアクセスし、情報を読み解き、真実を突き止める力。

・政治的意図を見抜く力。

→　新しい政治教育の必要性（⇒　資料①）

・「憲法学習を土台とした主権者教育や人権教育」からの更なる発展。

・理念を覚え込むのではなく、社会科学的に分析して判断・選択・行動できる力をつける。

⑤高校生の自主活動と交流の促進―その核としての平和ゼミの発展。

中・高生、学生・若者、市民が一緒に学び合い、行動する、ゆるやかなサークルづくり。

大人は金を出し、車を出し、活動を支える支援者に。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【予告】

第33回ふくしま復興支援フォーラム」（2013年3月15日（金）　18時30分～）

テーマ　「新生ふくしま」の原動力としての「社会的企業」の意義と可能性

～福島県での起業支援活動を通じて感じたこと～」

報告者　坪田哲司　氏（地域・社会共生プロデューサー）

会　場　福島市　市民活動サポートセンター　会議室

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第31回フォーラム（「葛尾村における避難と復興に向けた取組み」／金谷喜一氏）で寄せられたご意見等。（2013.2.22）

★金谷副村長さんは、小規模な村だからとおっしゃっておられたが、避難にしろ復興計画策定にしろ、スムーズに行われたことに感銘を受けた。(R.N)

★これまでに誰も経験したことがない原発災害からの復興の難しさを改めて感じました。葛尾村が一日でも早く復興できるように、少しでも力になればと思います。(Y.H)

★葛尾村の基盤が、「豊かな自然、なかでも山林」であるなら、山林の除染が致命的なリスクと言えるのでは。山林の除染が見通し立たない今、まったく新しい村づくりを考えるしかないと思ってしまう。(S.N)

★福一原発事故によって何が起き、そのことでコミュニティーがややもすると崩れる中で、3.11直後から、光回線とＴＶ電話活用。2年後の現在は、公報は月2回または常時フォトフレームによって、時々の情報をきめ細かに出されている。毎朝、高齢者の見回りを行うことによって、地域の基礎（＝住民）を守り再生をめざす。その具体例をの一を知ることが出来ました。正確な情報の共有は大事だ！（T.S）

★葛尾で復興に向けた取り組みが、こんなに進んでいたとは知りませんでした。とても勉強になりました。(S.O)

★避難の過程の詳細な説明には胸をうたれた。村の管理者が的確で妥当な下してきたことに感心させられた。村の危機への対応の一つの典型を見る思いがした。災害以前の村の実力・蓄積が危機に際して、立派に生かされていると思った。(S.I)

★岩手県からはじめて参加しました。岩手県も原発の被害で、農産物は15％前年比で販売量が減少しています。しかし、国は失っていません。福島で避難されている人々が気お館できるようになって、復興・発展するまちづくりを応援していきたいと思います。(K.M)

★「小さな村だからこそコンパクトに動けた。」に感銘を受けた。昭和の大合併を経験しなかったから、この規模を維持できたと思います。この規模こそがこまわりがきく適正規模でしゅ。葛尾川の歌は、心にしみました。(Y.I)

★非常に誠実な話し方で、これだから村民も信じてついていけたのだろうと感じた・それでも3割は帰村しないというのは、厳しい。(Y.I)

★避難の経過・苦労の跡が良く分かりました。また、行政機関（村）として適切な対応を行ってこられたことが住民にとっては、安心できる材料となっているものと思われました。(K.F)

★小さな村の中でも、自主性と結束力の高さで、的確な判断・行動されているのを見て驚きま

した。(A.S)

★自治体合併の方向性が出された時の判断に対しての評価が一つ出たような気がする葛尾村の行動だったと思う。地域をつくるときの規模は、大きな意味を持つことを改めて感じた。／「なぜ葛尾村に住むのか、の理由がなければ帰っても仕方がない」といったような話があったが、そもそも「住みたい」との思いが、地域をつくっていく基本になっていくのではないかと思う。それがなくなってしまう（見出せなくなってくる）のは、本当に大変なこと。今回は葛尾村の自然が、住みたいと思う背後にあるとのことだったが、今後の地域づくりの方向性が難しいですね。そのときは復興なのか、創造なのか。(M.K)

★困難はたくさんあった／あるのだろうが、葛尾の事例は相対的にいえばスムーズな例だと感じました。あまりうまくいっていないことというのもあると思いますが、そういった点についても話をうかがいたいと思いました。小さな自治体の強みを活かしてがんばってほしい。(N.N)

★葛尾村には今まであまりなじみがなかったのですが、美しい風景があるのと同時に、情報通信基盤整備にも力を入れていたことを知り、感銘を受けました。小さな村の自主的に動く職員でこそできた避難のことも、もっと周知が必要かと思います。まだまだ大変な日々が続くと思いますが、一日も早い復興をお祈りしています。(K.Y)

★職員のお一人おひとりの懸命な努力と思いますが、非常にきめ細かい住民サービスを提供されている事に感銘を受けました。(S.Y)